
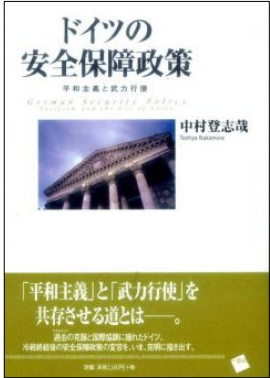


研究者総覧：中村 登志哉 (NAKAMURA, Toshiya)

氏名	中村 登志哉 (NAKAMURA, Toshiya)	
職名	教授	
所属講座	メディアプロフェッショナルコース	
学位（専攻分野）	Ph.D.（政治学）・メルボルン大学	
メールアドレス	nakamura@lang.nagoya-u.ac.jp	
個人のホームページ	http://nakamuratoshiya.com/	
研究分野	政治学	
	国際関係論	
	メディア研究	
現在の研究テーマ	ドイツおよび日本の外交・安全保障政策とメディアの言説	
所属学会	日本国際政治学会	
	日本 EU 学会	
	ISA (International Studies Association)	
主要著書・論文	“Challenges and Chances for Media: Perspective from Japan.” <i>Challenges and Chances for Media: Does Anybody Still Want to be a Journalist?</i> Ed. Toshiya Nakamura. Nagoya: Nagoya University, 2011. 61-87.	
	“Japan - Reshaping its Regional and Global Role.” <i>Strukturen Globaler Akteure: Eine Analyse Ausgewahlter Staaten, Regionen und der EU.</i> Ed. Algieri Franco and Kammel H. Arnold. Baden-Baden: Nomos Verlag, 2010. 83-96.	
	「欧州安全保障秩序とドイツ：メルケル政権の課題とディレンマ」、『日本 EU 学会年報』第 29 号、2009 年、203-221 頁.	
	“Transforming Japan's Security Policy: Diplomacy and Domestic Politics.” Proceedings of the 17th Biennial Conference, Asian Studies Association of Australia, 3 July 2008. http://arts.monash.edu.au/mai/asaa/	
	『ドイツの安全保障政策：平和主義と武力行使』、一藝社、2006 年.	
自己紹介文	中国の軍事的・経済的台頭、北朝鮮による韓国砲撃、中東で連鎖する独裁体制の崩壊。国際社会は新たな転換期に差し掛かっているようです。日本はこれらにどのような立場でどのように対応していくのか、重大な選択を迫られています。その一方で、メディアを取り巻く環境もグローバル化とデジタル化の波によって急速に変容しています。それに伴って、政治コミュニケーションの在り方も変貌しつつあります。例えば、政治家や国民のデジタル・メディアの活用や既存メディアの変容によって、これまでとは違った政治コミュニ	

	<p>ケーションの形が生まれつつあります。このような時代にあつて、洪水のような情報の中から確かな情報を選び取るスキル、その情報を客観的に読み解く力、そして、それらの事象を考察するための視座を持つことが極めて重要です。そうした力を涵養することを目的として、「ジャーナリズム論」および「メディアと政治」を開講しています。講義においては、政治コミュニケーションに関わる主要な基礎理論のほか、最新の研究動向を取り上げ、基礎的な力の養成を目指します。</p>
<p>受験生へのメッセージ</p>	<p>当研究室では、各種マス・メディアにおいて将来ジャーナリストとして活動したい、国際機関のオフィサーとして政策立案や広報活動に携わりたい、あるいはメディアと社会の関わりに関する研究者を目指したい、といった明確な目的意識を持った意欲的な学生諸君を歓迎しています。ドイツの社会学者マックス・ウェーバーはこう言っています。学問は思考の方法・道具・訓練を提供し、諸君に明晰さをもたらしてくれる。ただし、待ち焦がれるだけでは何も実現しない、と。当研究室では、自分なりに研究したいテーマがあり、そのために自ら積極的に勉強する覚悟がある学生諸君は大歓迎です。確かな日本語力のほかに、絶対的な情報量を誇る英語の文献を読み解く力、そして、できれば英語以外にもう一つ外国語ができることが望ましいでしょう。まず、諸君のテーマが私の研究分野と関連があるかどうか調べてみてください。そしてテーマが重なるようであれば、履歴書・研究計画書を準備してください。そして、メールで事前連絡の上、研究室を訪問してください。特に博士後期を志望する方は、必ず事前に研究室訪問が必要です。学生諸君との良い出会いを楽しみにしています。</p>



マックス・ウェーバー
(1894年)